（論文）

歴史から見た交通産業に対する学生の学びについての検討 (1)

：東京交通短期大学における2022年度の交通史講義を事例に

A Study on Student Learning for Transportation and Communication History Lectures

大野　絢也*
Junya Ohno

要旨

東京交通短期大学運輸科における専門科目「交通史」講義内で行った学生アンケートおよび提出課題の内容を分析し、短期大学における歴史から見た交通産業に対する学生の学びについて、歴史教育の実践課題を自己評価的に整理した。そして本稿における検証の結果、交通産業を歴史学的アプローチから見る交通史講義の受講を通し、多くの学生にとって鉄道だけでなく航空機・自動車・船舶・通信など様々な交通機関に視野をひろげるのに役立っていたことが明らかとなった。昨今の交通産業をめぐる現状を踏まえて、学生のニーズに合わせた社会認識形成を支援しそれぞれの基礎的資質を高める上でも、近代以降における交通機関の発展過程に重点を置いた交通史講義は有効性を持っている。また、現在の国際情勢や地域社会における課題など社会的分野の知識に関心を持つ契機となっていた側面があったことも指摘した。大人数の受講者を対象とした交通史講義において、いかに個々の学生の視野をひろげられるような授業を実践するかが今後の課題である。

キーワード：　交通史　交通産業　学生アンケート　歴史教育　歴史学的アプローチ

1.　はじめに

本稿は、東京交通短期大学運輸科（以下、「本学」と省略）の「歴史から見た交通産業」に対する学生の学びについて、2022 年度の交通史講義における学生アンケートおよび提出課題のデータを収集し、本学学生が交通史の受講を通してどのような認識を得ることができたのか検証したうえで、今後の授業改善に向けた方向性の検討をまとめたものである。

本学における学生の多くは卒業後、日本国内の様々な交通産業に関連する企業へ就職することを目指している。特に本学学生で共通しているのは鉄道志向が強いという側面である。そのため、学生の視野は限定的になりがちであり、鉄道には興味を強く持つもののそれ以外の交通機関に対し、関心のあまり高くない傾向がある。本学の学生要覧「本学で学ぶこと」の文中においても、「本学はその歴史からも分かるように、これまでの長い間にわたって各鉄道会社と深いつながりを持っており、多数の

* 〒170-0011　東京都豊島区池袋本町2-5-15　東京交通短期大学運輸科専任講師　daye1987@toko.hosho.ac.jp

先輩がそこに就職しているから、学生の大半が将来の職業を鉄道に決めていても当然である。したがって、学生のニーズに対して、本学での就職活動の指導は、鉄道会社を中心に行っている」と記されている。以上のような学生のニーズにもとづいて、本学では交通産業のなかでも鉄道業界に特化した教育を展開しており、多数の研究も行われている。本学における研究紀要を確認すると、前橋栄一［2019］[1]および藤原浩史、前橋栄一［2016a］[2]、前橋栄一、藤原浩史［2016b］[3]、佐藤勝治［2012］[4]、鈴木順一［1998］[5]など複数挙げられ、従来から模索がなされてきたことがわかる。

一方で、本学は学生に対し就職先の対象を鉄道業界に限定しているわけではない。前掲「本学で学ぶこと」の文中でも「本学は決して鉄道会社への就職を第1の目的とする者だけの短大ではない。今日の交通は自動車や船舶、航空機を抜きにしては語れない。また輸送関連産業も流通業、物流業、旅行業から情報産業まで広い範囲にわたっている」としている。さらに2019年以降に拡大した新型コロナウイルス感染症の流行とそれにともなう様々な社会変化によって、交通産業も大きな影響を受けることとなった。本学学生が鉄道業界に限らず交通産業の各業種に就いたのち、これまでの業態とは異なる交通機関の業務に関わることも増えていくことが予想される。このように本学での教育活動は、鉄道業界だけでなく交通産業を中心とした幅広い分野で活躍できる人材を育成することに努めなければならない。

筆者は、2022年度より本学に専任講師として赴任し、2年生を対象とした交通史講義を担当する機会を得た。その授業実践を通して、本学学生の多くが鉄道業界に強く関心を寄せていることや、受講前の段階において鉄道以外の交通機関に対する関心が低いことを、学生とのコミュニケーションなどを通し実感してきた。そのため、受講生が少しでも視野をひろげられるような授業内容の改善に取り組み、学生アンケートや課題・授業コメントのなかでその効果がどの程度あったのかを把握する方法をとった。

2. 交通史講義の概要

2.1 講義の位置づけと授業内容

本学における交通史の講義は、2年生の学生を対象とした専門科目であり半期で2単位を取得することができる。2022年度の場合、運輸科全体で79名の受講生（履修登録者）であった。

テーマを「歴史から見た交通産業」という題目に設定し、交通体系の形成と歴史的発展について教授する交通史講義は、前述のような本学学生の強い鉄道志向に対して、他の交通機関にも視野をひろげることを意図する専門科目の1つとして位置づけられている科目である。鉄道に加えて自動車や船舶・航空機・通信なども含めた各交通機関の発展過程を学ぶことで、それぞれの特徴や関連性に気づ

---

[1] 前橋栄一「鉄道科学教育の展開」『東京交通短期大学研究紀要』第24号、東京交通短期大学研究会、2019年。
[2] 藤原浩史、前橋栄一「プロフェッショナルのための鉄道科学通信教育の活用に関する考察」『東京交通短期大学研究紀要』第21号、東京交通短期大学研究会、2016年。
[3] 前橋栄一、藤原浩史「博学連携を利用した鉄道科学教育について」『東京交通短期大学研究紀要』第21号、東京交通短期大学研究会、2016年。
[4] 佐藤勝治「短期大学「第三部」の創設意義と現状――第三部的発想の教育システムの構築の模索」『東京交通短期大学研究紀要』第17号、東京交通短期大学研究会、2012年。
[5] 鈴木順一「短大の自己点検・評価をめぐる課題――故今井則義前学長と東京交通短大」『前学長今井則義先生追悼論文集（交通論叢第38号・東京交通短期大学研究紀要第8号合併号）』東京交通短期大学研究会、1998年。

かせることを意図した授業内容となっている。最終的には現代の交通機関が抱える様々な問題について、自らの意見を持つことが到達目標となっている。

2022年度における授業内容の詳細は、次に示したとおりである。

2022年度の講義内容

第1講	4 / 15	オリエンテーション・【自動車】首都高速
第2講	4 / 22	【自動車】国産乗用車の開発
第3講	5 / 6	【鉄道】災害と鉄道網
第4講	5 / 13	【鉄道】鉄道輸送の高速化（新幹線）
第5講	5 / 20	【船舶】日本における船の役割
第6講	5 / 27	【船舶】船の歴史
第7講	6 / 3	【自動車】自家用車の普及
第8講	6 / 10	【自動車】物流革命
第9講	6 / 17	【鉄道】鉄道網を支える技術①（トンネル）
第10講	6 / 24	【鉄道】鉄道網を支える技術②（みどりの窓口）
第11講	7 / 1	【鉄道】鉄道網を支える技術③（自動改札機）
第12講	7 / 8	【航空】航空機の歴史（世界）
第13講	7 / 15	【航空】航空機の歴史（日本）
第14講	7 / 22	【航空】エアラインと空港
第15講	7 / 29	【まとめ】ディスカッション
期末試験	8 / 5	筆記論述課題（選択）

2.2　講義の視点と特色

特に、産業革命を契機として始まる近代社会が交通体系の整備によって、どのような影響を受けていくのかという視点を持つことで、現代社会の成り立ちについても深く理解できるようになることを目的としている。現代の交通が抱える種々の課題に直結する問題を扱うため、対象時期は近現代（19～20 世紀）が中心となるが、各交通機関の起源など必要に応じて古代・中世・近世の交通体系も扱っている。この流れのなかで、旅客や貨物をより高速に、より遠方に輸送することを可能としたことに解説の力点をおくことで影響力の大きさに気づいてもらうことを意図している。地域や国といった枠組みをこえて国際関係や地域社会との関わりといった様々な面にも大きな影響を与えてきた面に着目してもらうことで、社会的分野の認識も深めることができる。

さらに、コロナ禍の収束後には再びグローバル化の進展が進み、外国人のとの交流も増えていくと想定されているため、国内だけでなく幅広い視野を持つことが求められている。そのため、授業で扱

う歴史的事象の対象地域は日本を中心としつつ海外の事例もとりあげることで、学生の視野を海外に向けることも目指している。

3. 受講生に対する調査方法

本講義の受講生に対する認識調査は、2022年度の交通史講義が対面方式であったものの、主にオンラインを活用して全体状況を把握する手法を用いた。学生アンケートや課題・授業コメントの提出は、本学の Google Classroom を利用して行っている。特にアンケートや授業コメントは Google Forms を用いて、各学生のアンケート結果を回収した。なお一部の課題提出は、紙に記入させたものを直接対面で提出、もしくはメール添付によるデータで提出させている。

受講生には、全15回にわたってアンケート・課題・授業コメントいずれかの提出を求めており、それぞれの授業内容に対する学生の反応を収集することができた。一部の欠席者や未回答者も含まれるものの、毎回の講義後に多くの回答数を確保している。集計結果は円グラフやスプレッドシートなどでデータとしてまとめ、一部を受講生に対して共有しながらフィードバックを行った。以上のような方法をとり、受講生の全体状況や反応をデータとしてとりまとめた。

4. データの集計結果

4.1 受講生の全体状況

全15回の交通史講義終了時に行った学生アンケート・授業コメント・提出課題の集計結果を以下にまとめて提示する。いずれの質問項目も、受講生の交通史講義に対する関心がどのような方向性にあるかを探るためのものである[6]。

第1講　オリエンテーション・【自動車】首都高速（4月15日実施）：学生アンケート

第1講では、オリエンテーションおよび導入部分である「【自動車】首都高速」の授業内容をもとにして、以下に挙げる2問の質問を行った。その結果は次のとおりとなった。

質問1　あなたはどの交通機関に対して最も興味関心を持っていますか？

交通機関の種類	人数（人）	割合（%）
鉄道	68人	86.0%
自動車	3人	3.7%
航空機	4人	5.0%
船舶	2人	2.5%
通信	1人	1.2%
その他	1人	1.2%
合計	79人	100.0%

[6] なお割合の項目は、いずれのパーセンテージも小数点第二位以下の数値を切り捨てて表記している。

質問2　あなたはどの業界に就職を志望していますか？

業界	人数（人）	割合（%）
鉄道業界	65人	82.0%
バス・タクシー業界	3人	3.7%
航空業界	2人	2.5%
流通・物流業界	1人	1.2%
通信業界	0人	0%
観光業界	3人	3.7%
その他、一般企業	5人	6.3%
合計	79人	100.0%

以上の結果から、交通史講義の受講生のなかで8割以上の学生が強い鉄道志向を持っていることが改めて判明した。そのため、鉄道以外の交通機関も授業内容の対象となる交通史講義において、様々な交通機関に関心を抱かせることが課題となった。

第2講　【自動車】国産乗用車の開発（4月22日実施）：授業コメント

第2講では、「【自動車】国産乗用車の開発」の授業終了後、交通史講義受講生の社会科系科目に対する興味関心の度合いをはかるため、以下に挙げる2問の質問を行った。その結果は次のとおりとなった。

質問3　あなたは地理や歴史など社会科の科目が得意でしたか？

得意か、不得意か	人数（人）	割合（%）
非常に得意である	5人	6.3%
ある程度得意である	11人	13.9%
どちらでもない	14人	17.7%
少し苦手である	19人	24.0%
非常に苦手である	27人	34.1%
その他	1人	1.2%
未回答	2人	2.5%
合計	79人	100.0%

質問4　あなたは交通史を学ぶにあたって、どの時代に最も興味関心を持っていますか？

時代	人数（人）	割合（%）
前近代（産業革命以前）	0人	0%
近代（19世紀）	0人	0%
近代（20世紀前半）	15人	18.9%
現代（20世紀後半）	24人	30.3%
現代（21世紀）	23人	29.2%
未来	15人	18.9%
未回答	2人	2.5%
合計	79人	100.0%

以上の結果から、交通史講義の受講生であっても半数以上の学生が地理や歴史など社会科系の科目に対して苦手意識を持っていることが判明した。また交通史の対象時期は、より現代に近い時代や未来に興味関心の傾向があることが分かった。

第3講　【鉄道】災害と鉄道網（5月6日実施）：学生アンケート

第3講では、「【鉄道】災害と鉄道網」の授業内容をもとに、受講生の出身地と興味関心の方向性との関連性について全体状況をはかるため、以下に挙げる3問の質問を行った。その結果は次のとおりとなった。

質問5　あなたの出身地はどちらですか？

地域	人数（人）	割合（%）
北海道地方	0人	0%
東北地方	9人	11.0%
関東地方	51人	64.5%
中部地方（北陸地方を含む）	13人	16.4%
近畿地方	2人	2.5%
中国地方	2人	2.5%
四国地方	1人	1.2%
九州地方	1人	1.2%
その他（海外など）	0人	0%
合計	79人	100.0%

質問6　あなたは交通史を学ぶにあたって、どの地域に最も興味関心を持っていますか？

地域	人数（人）	割合（%）
北海道地方	7人	8.8%
東北地方	1人	1.2%
関東地方	35人	44.3%
中部地方（北陸地方を含む）	12人	15.1%
近畿地方	12人	15.1%
中国地方	8人	10.1%
四国地方	2人	2.5%
九州地方	1人	1.2%
合計	79人	100.0%

質問7　あなたは将来どの地域で働きたいと考えていますか？

地域	人数（人）	割合（%）
北海道地方	5人	6.3%
東北地方	1人	1.2%
関東地方	29人	36.7%
中部地方	7人	8.8%
北陸地方	2人	2.5%
近畿地方	5人	6.3%
中国地方	3人	3.7%
四国地方	1人	1.2%
九州地方	1人	1.2%
鉄道業界であればどこでも良い	25人	31.6%
合計	79人	100.0%

以上の結果から、受講生の出身地分布と興味関心のある地域について把握できた。学生の出身地を地域別に見ると関東地方だけでなく東北地方や中部地方、さらに西日本からも一定数の学生が上京して本学に入学していることがわかる。また出身地と興味関心のある地域が一致している場合が多いものの、一定の割合で地方に関心を持つ学生がいることも判明した。上記の結果は、本学学生の強い鉄

道志向を示すだけでなく、出身地ではなく興味関心のある地域と将来就職したい地域が連動している可能性があることも指摘しておきたい。

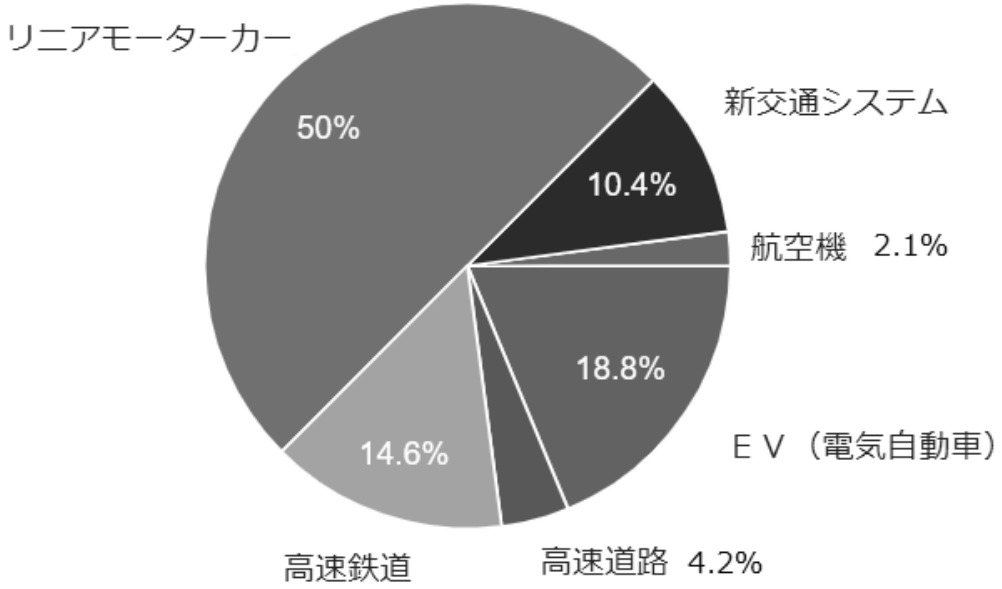
4.2　受講生の反応

第4講以降は、学生アンケートおよび授業コメントによって判明した本学学生の全体状況を踏まえて、授業内容を少しずつ反映させたものに改善し、受講生の反応をはかる質問を行った。

第4講　【鉄道】鉄道輸送の高速化（新幹線）（5月13日実施）：授業コメント

第4講では、「【鉄道】鉄道輸送の高速化（新幹線）」の授業内容をもとに、以下に挙げる1問の質問を行った[7]。その結果は次のとおりとなった。

質問8　あなたはどの交通機関の発展に注目していますか？



以上の結果では、「リニアモーターカー」と「高速鉄道」を選択した学生が6割以上をしめていた。引き続き受講生の鉄道志向の強いことが示されているものの、「ＥＶ（電気自動車）」や「高速道路」を選択する学生も2割をしめ、講義開始当初の傾向と比較して自動車業界に対する関心が高まっている。これは、交通史講義の前半部分で自動車および道路交通に関する内容を扱ったことにより、学生の関心を鉄道以外の交通機関に振り向けることができた結果であると考える。

[7] 質問8は、Google Forms のラジオボタン機能を利用した学生アンケートを行い、円グラフでの表示形式とした。なお欠席者および未回答者の割合は反映されていない。

第5・6講　【船舶】日本における船の役割・船の歴史（5月27日実施）：授業コメントおよび課題

第5講および第6講では、「【船舶】日本における船の役割」と「【船舶】船の歴史」の授業内容をもとに、以下に挙げる1問の質問を行った。その結果は次のとおりとなった。

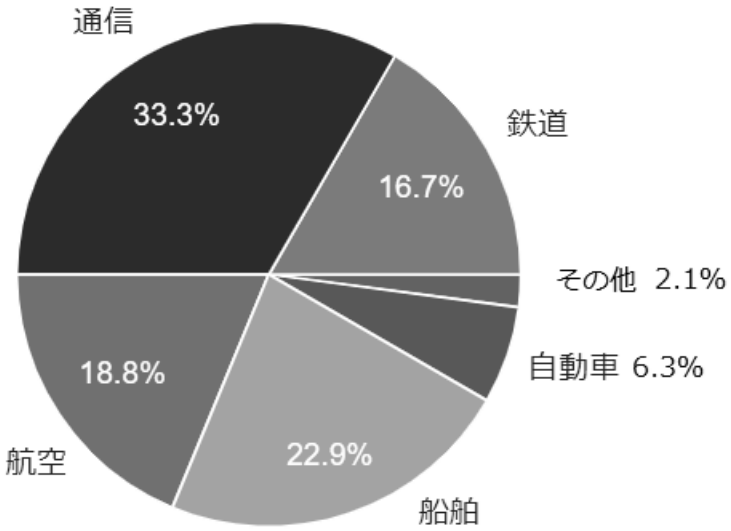
質問9　あなたは船舶が果たした歴史的な役割について、どのような側面を重視しますか？

内容	人数（人）	割合（%）
国や地域を結びつけることができた	29人	36.7%
大量の物資を効率的に運ぶことができた	21人	26.5%
感染症の蔓延など負の影響もあった	15人	18.9%
様々な情報や技術を伝えることができた	5人	6.3%
その他	2人	2.5%
未回答	7人	8.8%
合計	79人	100.0%

第7・8講　【自動車】自家用車の普及・物流革命（6月10日実施）：授業コメントおよび課題

第7講および第8講では、「【自動車】自家用車の普及」と「【自動車】物流革命」の授業内容をもとに、以下に挙げる1問の質問を行った[8]。その結果は次のとおりとなった。

質問10　あなたは物流革命のイノベーションのなかで、どの交通機関に注目しますか？



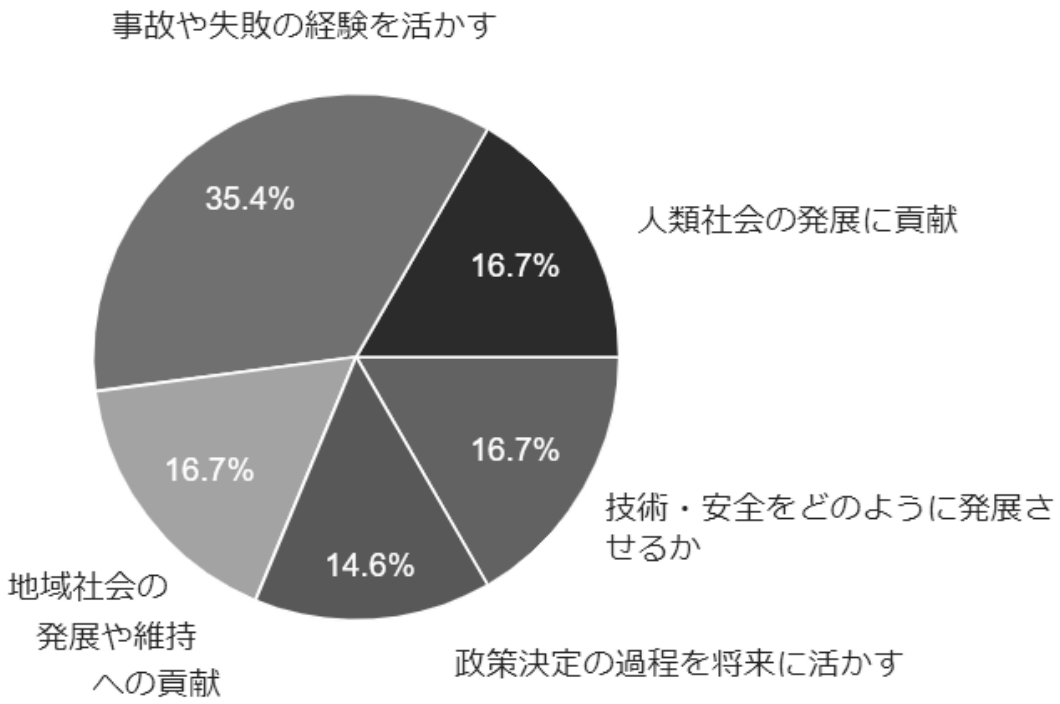
[8] 質問10は質問8と同様に、Google Forms のラジオボタン機能を利用した学生アンケートを行い、円グラフでの表示形式とした。なお欠席者および未回答者の割合は反映されていない。

以上の結果では、個々の学生の興味関心が多岐にわたっていたことを把握することができた。第5～8講では、船舶や自動車、通信など様々な交通技術の発展が世界に与えた様々な影響について講義し、各学生にどの点を重視するかを考察させる課題も同時に課した。これら一連の作業を通じて、受講生に対して交通機関の発展が抱える多面的な影響力について具体的に考える機会を設けることで、より幅広い視野を持てるように促すことができたと考える。

第9・10・11講　【鉄道】鉄道網を支える技術①～③（7月1日実施）：授業コメントおよび課題

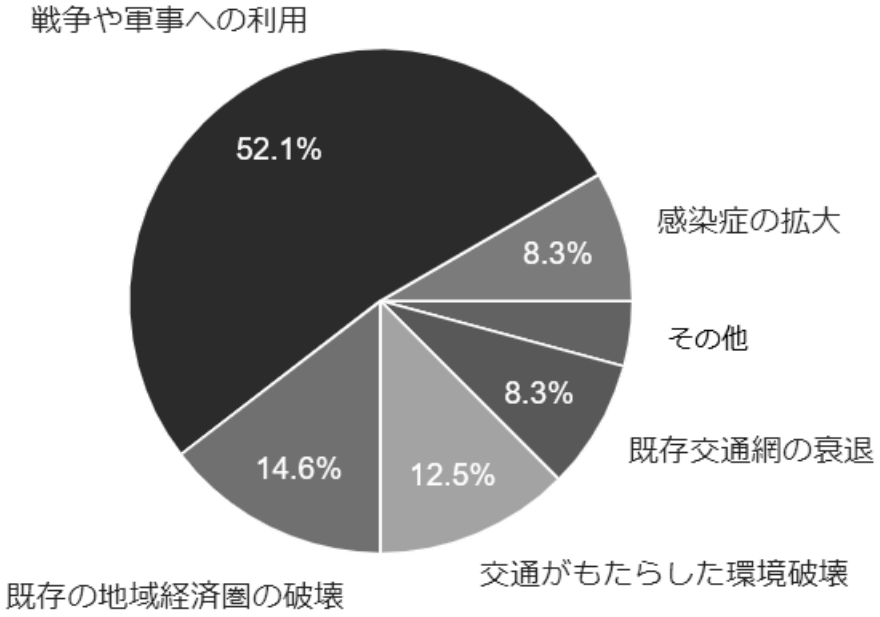
第9～11講では、「【鉄道】鉄道網を支える技術①（トンネル）」、「【鉄道】鉄道網を支える技術②（みどりの窓口）」、「【鉄道】鉄道網を支える技術③（自動改札機）」の授業内容をもとに、以下に挙げる2問の質問を行った[9]。その結果は次のとおりとなった。

質問11　あなたは交通機関の発展過程において、どの要素に注目しますか？



[9] 質問11・質問12も質問8・質問10と同様に、Google Forms のラジオボタン機能を利用した学生アンケートを行い、円グラフでの表示形式とした。なお欠席者および未回答者の割合は反映されていない。

質問12　あなたは交通機関の発展によってもたらされた負の影響のなかで、どの要素に注目しますか？



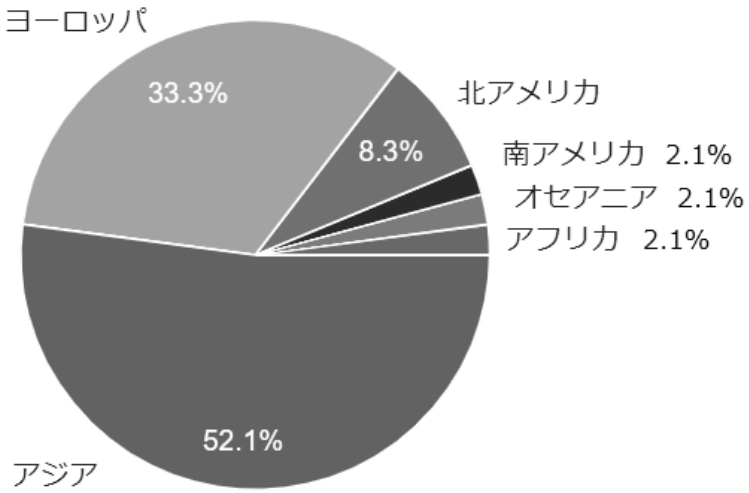
以上の結果から、技術的な側面に焦点を当てた授業内容を踏まえて、個々の学生が交通機関の発展過程に対し次第に認識を深めたことを把握することができた。また、質問12の「交通機関の発展によってもたらされた負の影響」において「戦争や軍事への利用」を選択した学生数が「感染症の拡大」という選択肢を上回る5割以上の結果となったことに注目したい。今年度前期の交通史講義を行うなかで、時事問題として2月以降に勃発したウクライナ紛争における交通ネットワークの重要性に触れる機会が多かった。各学生の国際ニュースに対する関心も授業コメントや課題内容のなかで、認識が高まっていた。学生の興味関心は、長引く新型コロナウイルス感染症の拡大にともなう社会への影響よりも、国際情勢の急激な変化に注目が集中したと指摘することができよう。その点が授業コメントの内容に色濃く反映される結果となった。

第12・13・14講　【航空】航空機の歴史・航空会社と空港（7月22日実施）：授業コメントおよび課題

第12～14講では、「【航空】航空機の歴史（世界）」、「【航空】航空機の歴史（日本）」、「【航空】航空会社と空港」の授業内容をもとに、新型コロナウイルス感染症の影響で停滞したグローバル化に対する本学学生の認識を把握することを意図して、以下に挙げる1問の質問を行った[10]。その結果は次のとおりとなった。

[10] 質問13も、Google Forms のラジオボタン機能を利用した学生アンケートを行い、円グラフでの表示形式とした。なお欠席者および未回答者の割合は反映されていない。

質問13　あなたは世界各地における交通発展のなかで、どの地域に注目していますか？

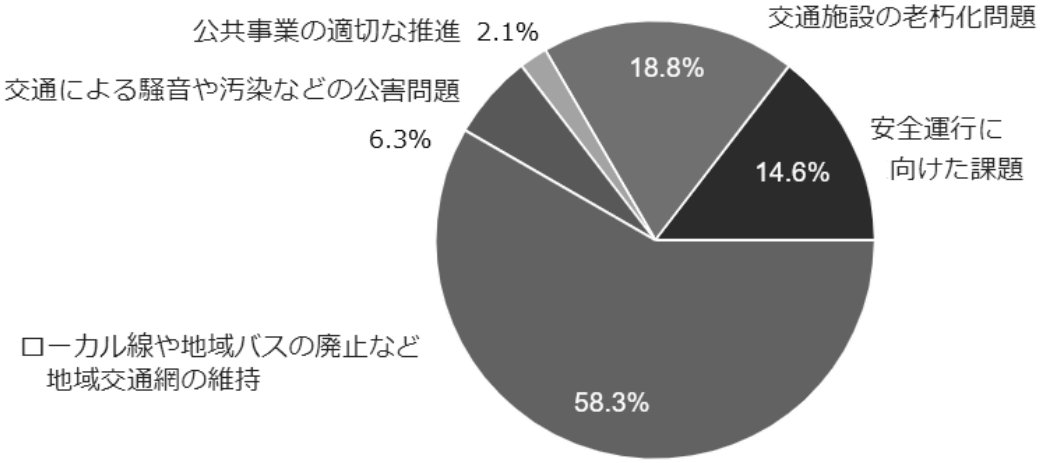


以上の結果は、現代において受講生の注目する対象地域が「アジア」と「ヨーロッパ」に集中しているという点を把握できた。ここからは、「北アメリカ」も含め、ユーラシア大陸以外の地域に対する関心は比較的低いことが判明した。

第15講　【まとめ】ディスカッション（7月29日実施）：学生アンケートおよび課題

第15講では、「【まとめ】ディスカッション」として受講生同士で交通史に関する議論を行ってもらい、その内容をもとに以下に挙げる2問の質問を行った[11]。その結果は次のとおりとなった。

質問14　あなたは今後の交通機関が抱える課題のなかでどの点に注目していますか？



[11] 質問14も、Google Forms のラジオボタン機能を利用した学生アンケートを行い、円グラフでの表示形式とした。なお欠席者および未回答者の割合は反映されていない。

質問15　あなたは今学期の交通史講義において、どの授業回の内容に最も関心を持ちましたか？

授業回	内容	人数（人）	割合（%）
第1講	【自動車】首都高速	3人	3.7%
第2講	【自動車】国産乗用車の開発	8人	10.1%
第3講	【鉄道】災害と鉄道網	4人	5.0%
第4講	【鉄道】鉄道輸送の高速化（新幹線）	8人	10.1%
第5講	【船舶】日本における船の役割	2人	2.5%
第6講	【船舶】船の歴史	6人	7.5%
第7講	【自動車】自家用車の普及	5人	6.3%
第8講	【自動車】物流革命	2人	2.5%
第9講	【鉄道】鉄道網を支える技術①（トンネル）	7人	8.8%
第10講	【鉄道】鉄道網を支える技術②（みどりの窓口）	7人	8.8%
第11講	【鉄道】鉄道網を支える技術③（自動改札機）	8人	10.1%
第12講	【航空】航空機の歴史（世界）	4人	5.0%
第13講	【航空】航空機の歴史（日本）	4人	5.0%
第14講	【航空】エアラインと空港	5人	6.3%
未回答		6人	7.5%

以上の結果から、受講生の興味関心が鉄道業界だけでなく他の交通機関に対しても視野をひろげていることが把握できた。質問15で受講生が選んだ選択肢の分布は、継続して鉄道業界の内容に対する関心が高い傾向は見られるものの、各回にまんべんなく分散していることがわかる。これは、交通史講義の開始当初における学生アンケートの傾向と比較して、受講生の興味関心の対象が大きく変容したと見ることができるだろう。

5.　まとめにかえて

本稿における学生アンケートや授業コメント、提出課題の内容などのデータ検証の結果、本学学生は交通産業を歴史学的アプローチから見る交通史講義の受講を通し、鉄道だけでなく航空機・自動車・船舶・通信など各種の交通機関に視野をひろげたことを把握できた。本学における交通史の講義は、国内の研究教育機関においても独自の性質を持っており、交通産業へ就職する学生にとって様々な面で役立つものであると考える。昨今の交通産業をめぐる現状を踏まえて、学生のニーズに合わせた社会認識形成を支援しそれぞれの基礎的資質を高める上でも、近代以降における交通機関の発展過程に重点を置いた交通史講義は有効性を持っている。また、現在の国際情勢や地域社会における課題など

社会的分野の知識に関心を持つ契機となっていた側面があったことも指摘したい。

2023年度の講義計画（予定）

第1講	4 / 10	オリエンテーション・【導入】マッピング作業
第2講	4 / 17	【道路と交通】陸上交通の起源と役割
第3講	4 / 24	【水運と交通】水上交通の起源と発展
第4講	5 / 1	【航空機と交通】航空機開発と技術の発展
第5講	5 / 15	【都市化と交通】市電・路線バス・地下鉄・都市鉄道の形成史
第6講	5 / 22	【自動車産業と交通】自動車の技術開発と普及
第7講	5 / 29	【航空産業と交通】国産航空機の開発と課題
第8講	6 / 5	【物流革命と交通】交通機関の連携と効率化
第9講	6 / 12	【公共事業と交通】高速道路・新幹線・空港・運河港湾
第10講	6 / 19	【地域社会と交通】求められた長大橋梁・トンネル建設
第11講	6 / 26	【交通の民営化】模索される地域交通網の維持形態
第12講	7 / 3	【交通政策の歪み】交通事業の延期や中止の背景
第13講	7 / 10	【交通とグローバル化】交通網の発展にともなう世界の一体化
第14講	7 / 17	【車社会と過疎化の展開】地域社会に必要な交通とは何か？
第15講	7 / 24	【まとめ】総括とディスカッション
期末試験	7 / 31	筆記論述課題（選択）

大人数の受講者を対象とした交通史講義において、いかに個々の学生の視野をひろげられるような授業を実践するかが今後の課題である。2022 年度における受講生の反応を踏まえ、次年度では上記のような内容でさらに講義内容を充実させることを目指したい。

参考文献

青木栄一「近代交通研究における歴史地理学の性格と方法」『歴史地理学紀要』第28号、1986年。

佐藤勝治「短期大学「第三部」の創設意義と現状――第三部的発想の教育システムの構築の模索」『東京交通短期大学研究紀要』第17号、東京交通短期大学研究会、2012年。

鈴木順一「短大の自己点検・評価をめぐる課題――故今井則義前学長と東京交通短大」『前学長今井則義先生追悼論文集（交通論叢第38号・東京交通短期大学研究紀要第8号合併号）』東京交通短期大学研究会、1998年。

土屋武志「大学における『歴史教育』実践に関する一考察――愛知教育大学における教養科目『歴史

学』・専門科目『史学概論』を例に」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』創刊号、1998年。
日本歴史地理学研究会編『情報・交通の歴史地理』古今書院、1986年。
藤原浩史、前橋栄一「プロフェッショナルのための鉄道科学通信教育の活用に関する考察」『東京交通短期大学研究紀要』第21号、東京交通短期大学研究会、2016年。
前橋栄一、藤原浩史「博学連携を利用した鉄道科学教育について」『東京交通短期大学研究紀要』第21号、東京交通短期大学研究会、2016年。
前橋栄一「鉄道科学教育の展開」『東京交通短期大学研究紀要』第24号、東京交通短期大学研究会、2019年。
山下悟「交通網の発達を見て楽しく歴史を学ぶ」『歴史地理教育』第788号、2012年。